

ゆるり

昭和堂・ゆるりで
出版された本のご紹介

vol. 32



久保 進 祈りと光の情景～五島の教会とそのルーツ「満月に照らされる堂崎教会」

特集



ノスタルジー
折々の昭和記

Nostalgie



● 風木雲太郎 — 没後十年 —
随筆集「わが星の道」より

● かけがえのない日々 第二章 田添京子

● わが人生の並木道 犬塚秀一

● さらば二足の靴 福永玲子

● 十三夜 河井雄治句集

■ フォト歳時記Ⅳ 祈りと光の情景

〜五島の教会とそのルーツ／久保 進

■ 江戸しぐさの心を長崎に

未来の長崎のリーダーたちへ／宮崎牧子

■ 記念誌紹介シリーズ9 鎮西学院百三十五年記念

敬天愛人の系譜 鎮西学院人物伝

■ 詩集 そこに光があるから／北川暢子

■ 長崎歳時記 名勝の宴／堤げんじ



自費出版サロンゆるり

株式会社 昭和堂

「ゆるり」は長崎県内の主なコミュニティ
施設に無料で配布しています。

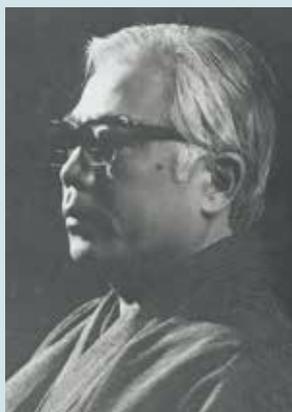
長崎を心から愛した詩人 — 没後十年 —

風木雲太郎

Kazaki
Kumotaro
[1913-2007]

「郷愁」

ふるさとは
月日を越えて生きる不思議な少女がある
白い雲を追ひ風頭ヶ丘にのぼると
想ひ出の街や十字架の道を
その少女は遠く近く手風琴にひびかせる
青い港を舞ひめぐる鷗の群にたたずむと
白いワルツの波にのり
その少女は昔の歌を甘たたく繰り返す
南京豆の匂ひにたそがれる丸山の石だたみ
幼な友だちを待つ朱い手すりに
その少女は花扇をかざし月のやうに現れる
遠い海のかなたの
風と星だけが訪れる稲佐の異人墓地
静かな夜の祈りのなかにあると
その少女は
街の灯に仄かに浮かぶマリアの像となる
ふるさとは
月日を越えて生きる不思議な少女がある



著者

随筆集『わが星の道』より

「長崎を知ろうと思うなら、長崎を訪れたり、長崎について書かれた本を読みあさるより、一人の詩人、風木雲太郎に会うがよい。」

昭和六十年に出版した随筆集『わが星の道』の跋文「優情の文体」で原子朗氏（詩人・早大教授）が著者のことをこう表現しています。

今回はこの本をもとに長崎を心から愛し、いつまでも若々しく、純粹な詩情を失わない詩人であった風木雲太郎氏の青春の軌跡をご紹介します。

★遠景残照

大正二年（一九一三）長崎市生れ。私は十六歳の時に初めて恋を知った。微笑みあうだけで指もふれないうちに、十二歳の少女は去った。地上の天使の昇天に、残された私の傷心は苦い杯となり、それにペンをひたし、詩を書くようになった。その失恋の傷口をやさしく繻帯のように包んでくれたのが、ハイネの『歌の本』であった。閑さえあれば、詩集一冊を手にして、風頭の丘にひとりのぼった。長崎という土地に生まれ育ち、多感な青春前期を、その特異な歴史と風土で過したことが、私の詩の温床となったようだ。十九の春に上京して青山学院に入学、ドイツ浪漫派、リルケなどへの傾倒が長く深かった。卒業後、神戸松竹座洋画宣伝部に勤務するも、支配人と芸術論争をして退職。

●火野葦平との出会い

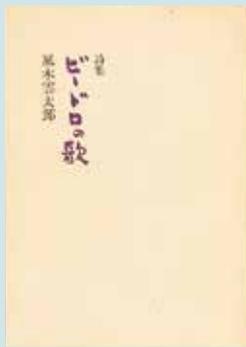
昭和十二年八月、召集令状がくる。私は二十五歳、兵庫県明石郡の小さな小学校の代用教員をしていた。神戸にくだるバスの中の私を追って、懸命に手をふり旗をふり叫び駆けた子供たちの姿が、いまでも眼底に残っている。

一兵士として杭州湾、バイアス湾、欽州湾と、三回の敵前上陸に参加、中支から南支にかけて三年間、戦場を駆けまわった。戦争は地獄であった。人間が人間であることを人間の極限で試される。非情冷酷な煉獄であった。

現地の軍芸誌『兵隊』に出した詩が当時、芥川賞作家で国民的英雄であった



「たこつぼの花」
昭和50年 風社刊



「ビードロの歌」
昭和40年 風社刊



「長崎詩篇」
昭和30年 東峰書房刊

火野葦平の目にとまり、南支軍報道部勤務を命じられ、『兵隊』の編集室へ転勤した。それ以来、火野さんの深い温情は、二十余年の歳月にわたって私の身辺にあった。(昭和三十五年逝去)

火野さんが、「私は小説を書くから、君は詩を書きなさい、本名の貞島米親では固苦しいからと言って、風と雲と木があれば即座に一篇の詩ができるということから、風木雲太郎が生まれた。

昭和十五年夏、除隊し母校の鎮西学院(竹の久保)の英語教師として教壇に立つ。(火野さんの推薦で「九州文学」同人となる)翌年、山雅房から『野戦詩集』が



「長崎暮色」
平成5年 岬の会刊



「レトロの旅」
昭和62年 昭和堂印刷刊



「わが星の道」
昭和60年 昭和堂印刷刊

●回想の宮崎康平

昭和十九年春の頃、宮崎康平さんが自宅へぶらりと立ち寄った。同じ文学と詩を共通の志とする者同志、直ちに胸襟を開いて文学談を盛んにした。その年の秋、恋女房のすみ子が結婚で二十三歳の若さで亡くなった。傷心を癒すのに、何か激烈な変動を求めていた私に、いっしょに仕事をしないかという康平さんからの勧誘を受け諫早の宮崎組南旺土木事務所勤めることとなった。訓育隊長という名目だったが、実際は康平さんの歴史研究や文学の話し相手が主な仕事だった。昼

間、土方の訓育という馴れない仕事のあと、夕食後から十一時、十二時と延々と続き、私を疲労困憊に陥し入れることが連夜の如く続くことがあった。後年の「まぼろしの邪馬台国」で知られるように彼独自の発想、鋭い直観力と新鮮なイメージに驚かされていた。



被爆地の惨状/長崎原爆資料館提供

終戦時は、南旺土木での資材確保のため福岡県にある宝珠山に登っては木材を確保し、久留米まで積み出す貨車の手配をしていた。新型爆弾(原子爆弾)による長崎全滅の悲報に接したのは、八月十日だった。十五日に終戦の詔勅放送があり、出張所の残務整理を終えて諫早に帰ることができたのは八月下旬だった。その翌朝、長崎行きの満員の列車に乗ったが、長与駅で降された。その先の浦上地帯の惨状には、息の根がとまるほどの衝撃をうけた。(その戦慄の体験から、私は数十篇の原爆詩を書いて現在に至っている。

★原爆詩

最初の作品(浦上天主堂附近)は、昭和二十一年六月文芸誌「午前」に掲載された。おそらく長崎で書かれた最初の原爆詩であろうと言われている。

■戦後の経歴

昭和二十二年より県立諫早高校の教諭となる。(同年九州詩人賞金賞)。

二十四年、上村肇らと詩誌「岬」を刊行。昭和二十六年に第二詩集「紫の笛」刊行(その中の「夜の宿」は堀口大学の絶讃を浴びる)

昭和三十年、東峰書房から第二詩集「長崎詩篇」を刊行、三十二年に長崎県文化功労賞受賞。

昭和三十六年に長崎市へ居住、県立長崎東高校で昭和五十年まで教鞭を執る。その間、昭和四十一年に第四詩集「ビードロの歌」、昭和五十年に第五詩集「たこつぼの花」を刊行。

昭和六十年秋、初の随筆集「わが星の道」が、昭和堂印刷三十五周年記念出版として諫早から出た。以後も昭和六十二年、第六詩集「レトロの旅」、平成五年八十歳の時に第七詩集「長崎暮色」を刊行。長崎県詩人会会長を務めた。平成八年に日本先達詩人顕彰。校歌、社歌の作詞多数。平成十九年十二月、九十四歳で永眠。

ふる里が長崎という
ただそれだけで
私の生涯は終わってもいいような気がする
遠い旅の空にあっても
その想いは深く郷愁の霧となり
私の足を石たたみの道へ向けさせる
(老楠歌)



弟の昔話

二人姉弟の私には、五歳下の弟がいる。弟は昔のことをとてもよく覚えている。情景だけではなく、その頃の人の心情も自分なりに解釈して覚えているのだ。

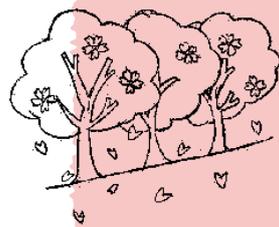
弟も私と同じように歳をとり、定年退職して故郷に帰ってきた。近頃は私の夫と三人でよく会食に行く。酔うほどに昔話は盛り上がり、弟の語り、何十年と目のを見なかった記憶の数々が生き生きと動き出す。

いつも昔の生家の風景から始まる。祖父母がいて、父母がいて、私たちが小さかった頃。夫もその話題についていける。夫と私は小中高校の同級生で家は隣同士。ほとんどしゃべったこともなかったのに、縁あって夫婦になった。だからお互いの家族を昔から知っていて、結構共通の記憶で楽しめる。もともと夫は、外国人を嫁にもらいたかったのに、なんで好き好んで隣の同級生？と、昔はよく言っていた。

昨夜はいきなり弟が、「炬燵でお母さんが竹の輪に銀紙を巻いていたよね」と語り出した。私が小

エッセイ集 かけがえのない日々 第二章 田添 京子

- 判型:A5判
- 頁数:136頁
- 製本:無線綴りカバー付
- 非売品



ことを、弟の語りから初めて知ることもある。ずーっと胸に抱えていた

というほど大げさなものでもないが、子供心に謎だった疑問も、ああそうだったのかなんて氷塊したりする。

弟の話で特に驚いたことがある。

「カレーの前の日は必ず魚の煮つけだったね」と弟。

「えーっ、パターン化したの？ なんだ？」と私。

昔はだしと言えば魚しかなかったから、祖母はその魚のだしで翌日カレーを作っていたと言うのだ。もちろんカレールーもないから、カレー粉を溶かしたさらさらのカレー。彼の記憶力と意外すぎる話に、開いた口がふさがらない。

二年程前私は、「美味しい記憶」というキッチン醤油のコンクールに応募したことがあった。タイトルは「おいしい食卓は家族の記憶」。まさにこの祖母が作ってくれた昭和のカレーのことを書いた。結果は音沙汰なしに終わったが、この弟のだしの話を入れて

いたら味付け抜群で入賞だったかもと、ちよつと残念。

それにしても何故、私より五つも年下の彼がこんなに深く覚えていて、私の記憶は抜け落ちていくのか。記憶力の問題なのか、人生への向き合い方なのか。

なんにせよ、こういう昔の回想は認知症予防にとってもいいらしい。

弟の脳にはまだまだ物語が眠っている。次の語りには何が飛び出すか、今から楽しみだ。

元長崎大学病院看護部長。昔から書くことが好きで、昨年7月に初のエッセイ集「かけがえのない日々」を出版。今回はシリーズ第二章として47話を集録。「弟の昔話」はこの中の一編





犬塚秀一 自伝

わが人生の 並木道



平成27年11月 旭日章受章 記念

平成二十七年夏、妻が入院し、自身も一人暮らしは不可能と考

えて入院となった。入院中ふと幼い頃の思い出が浮かび、退屈のぎに雑用紙に書いてみた。高年齢になった今では直前に見たことや聞いたことでもなかなか思い出せないことばかりだが、昔のことは新しく蘇って来るものも多い。私は米寿を迎えるまでいろいろな方々に有形無形のお世話になってきた。そこには多少でもお返しをしなければと思い、それが自分の人生でもあった。

生い立ち

昭和二年（一九二七）長崎県喜々津村生まれ。先祖代々の農



新婚旅行

奈良の春日大社（昭和32年5月27日）



初成りのみかん獲り

洞ノ巣の畑にて（昭和34年11月）

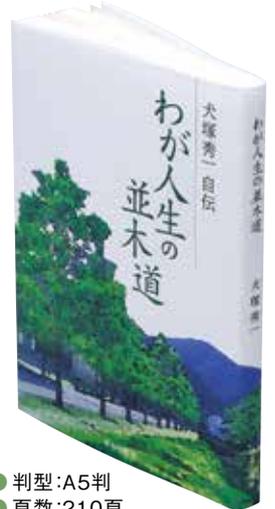
家の長男として、子供の頃から畑仕事、炭焼き、リヤカーでの行商など家の手伝いをよくしていた。兄弟が四人いたが、小学校の運動会で兄弟四人で一組のリレー種目に出場したことを思い出す。卒業式では代表で答辞を読んだ。

青春期―戦争の時代―

卒業後の進路は、親に負担がかからぬように勉強しながら給金がもらえ兵役も短縮されるという佐世保の海軍工廠の工員養成所を受験し、入所することができた。九州各地から集まった同期生は秀才揃いだった。難しい授業や実習でたくさんだったが、同期に遅れをとりたくな

かったので、潜水艦用の電球の明かりで、夜中着布団を被り眠い目をこすりながら自習をしていたこともあった。

十八年四月には大村にも養成所ができ移動したものの戦局悪化のため、十月繰り上げ卒業となり、海軍航空廠の一員となった。翌年四月、佐世保海兵団に入団し兵役につく。戦場へ向けての特訓の連続で、三ヶ月半の新兵教育を受け、私は千葉県館山市へ派遣されたあと満期となり、終戦は佐世保で迎えることとなる。やっと戦争が終ったという感慨と共に何でもっと早くやめられなかったかと思つた。



- 判型：A5判
- 頁数：210頁
- 製本：無線綴りカバー付
- 非売品

戦後、国鉄マンとして

戦後は知人の紹介で、国鉄喜々津駅に就職する。入ったばかりの私はさまざまな雑用をこなしたが、電信掛が国鉄の駅の中では出世コースと知り、大

分県の杵築分教所で十ヶ月に亘り技術の修得に励んだが、食糧事情は良くなり、いつも腹を空かせていた。卒業後は、長与にあった長崎管理部電務区電信掛、門鉄早岐輸送長、早岐分室電信掛を経て、昭和二十八年に諫早

駅出札兼電信掛となる。戦中戦後に勉強したくても生活することとで精一杯の頃から比べると少し余裕がとれる時代になったので、二十七歳にして諫早高校夜間部に入學。本職と家の農家の手伝いもしながらの通学は、自分の暇も持ち得ない期間だったが、良き師、良き友を得、人生の大切な勉強をさせて頂いた。

昭和三十三年四月に結婚。国鉄旅行には家族にも一年に十日間の無料パスが付与される制度があったので、諫早駅から寝台急行雲仙号に乗り、名勝日光、東京、お伊勢参り、大阪、京都見物と列車での七日間の旅は思い出半分、疲れ半分で帰宅した。三ヶ月後の七月二十五日、私

は労働組合の代議員として嬉野へ泊りがけで参加していた。夕方大雨で諫早が大変なことになっているとニュースで知る。翌朝急いで嬉野を出発したが、汽車やバスも途中までで、諫早駅へ辿り着けたのが夕方だった。駅は周りより高くなっていたので水には浸らなかったが、周囲は大変だった。被害に遭われた方々が避難してきて駅は救護所のような場所だった。

地元とともに

諫早駅には退職するまで三十年近く勤めた。四十年間勤務した国鉄も昭和五十八年に定年退職となる。これからは農業に専念しようと思っていた矢先、地区の区長が来て、いきなり（多良町町会議員）選挙に出てくれと言われる。地区の活動にいろいろ関わっていた私に白羽の矢が立ったらしい。結果、諫早市と合併するまでの六期二十二年間地域活動に尽力した。

今日まで苦労して育てた子供たちに助けられ、妻なき後、余生を送らせて頂いている。ありがたいことだと心から思う。この本の編集にあたっては、姪の犬塚泉、甥の犬塚桂両氏の特段の配慮で出来たもので、敬意を表し深甚の謝意を捧げたい。



両親と著者

エッセイ集

さらば二足の靴

福永玲子 著

- 判型:A5判
- 製本:無線綴カバー付
- 頁数:136頁
- 定価:非売品



ダンディと魔法使い

幼い時から、ずっと頭を離れない父の姿はいつもダンディだった。一番先に生まれた長女の役得で、他のきょうだいより多く父の姿を見て来た。夏になれば麻のスーツ、パナマ帽、浴衣の時はカンカン帽、しゃやれていた。冬はマント、オーバーにソフト、本当におしゃれだった。役所勤めだったので、冬は黒の官服。夏は白の官服。それに、もちろん冬は黒、夏は白であった。それに祭日とか何か特別の日の正装は、短剣をさげていた。父は半任官だったので短剣、もう少し偉くなると将校待遇のサーベル、肩章も位が上がると模様のあるところが金や銀のモールで刺繍されるので中々華やかだった。父は終戦後すぐ亡くなったのでこのスタイルは、憧れに終わってしまった。でも私としては、麻のスーツの方が憧

れの父だった。台北の静かな風景には、やはり平和な服装が良い。五人の子供及び母のふだん着は、洋裁なんて知らない母が作っていた。幼い時から不思議だったが、何故か家には足踏ミシンが坐っていた。おかげで洋裁の出来ない母の手作りで私達子供は育った。布は父がデパートで買って来て、家で適当に裁ちそれを母が縫った。昔の母は魔法使いだった。ちなみに家のミシンは昔なつかしシンガミシンで、子供の服は母が縫うものと思いきや、魔法使いとダンディがそろって、わが家のファッションは完璧だった。

記念樹は椎

むかしむかしの話をひとつ。記念樹といふべきか家の庭に山でもないのに大きな椎の木が立っている。本来は山に生えている筈だった。その頃はまだ新婚ホヤホヤ、二人で足元も軽やかに近場の探訪に明け暮れていたが、突然茂木に行ってみようという事になった。愛宕から茂木と言えばスグソコと思うかもしれないが、私は車酔いをするので、半分は命がけ、又々

大げさなといわれる節もあるけれど、茂木への道は両側から木が生い茂りまるで避暑地の様な趣き、しかしカーブが意外と多い、当然ながら私は半死半生となる。車から降り山添いの丘に登った。昔は灯台の役目をしていたのでと思われる常夜灯があり、その位置からは雲仙や天草の島影も見え素晴らしい。足元の何の実か不明ながら思わず拾い旅の記念にした。思えば新婚ホヤホヤだったので、見るものすべて美しく感じられたのであろうか。美しく整備されていたら、それで美しいのが当たり前なのだが、自然のものはたとえ露草の一本まで心が洗われるようだ。

家に着き、さっそく椎の実を栗のようにフライパンで炒った。美味というものではなかったが記念と思う事にした。山から連れて来た実は庭に投



げた。何年かたって庭に見知らぬ山の木が一米五センチぐらゐの枝を揺らしていた。何と庭に投げた椎の実だった。今はもう大樹となり夏の庭をわがもの顔にそびえている。元気で、葉はよく茂りだんだん手におえなくなってきたが、あの日の思い出のための存在のようで愛おしい。

著者は長年、地元のコミュニティ誌に毎月エッセイを投稿されています。家族やふるさと、身のまわりのこと、そして御主人との旅の思い出など。残念ながら夫の信太郎さんが昨年末に急逝されました。

「短歌とエッセイは止めるなよ」と遺言めいた言葉を残されていたそうです。大切なその思いを込めて今回は、平成23年10月から29年1月までを、二足の靴第3集としての発行です。本書63話の中から、2話ご紹介いたします。表紙はお孫さんの福永りょうさんの作です。

めくるめく君に添い来て六十年
走馬灯の如きひと世か 玲子

福永玲子

昭和3年 台北生まれ

52年 水壺同人、あすなろ入社

あすなろ社相談役

著書 「歌と日記 台湾時代」「歌

集四季の旋律」「エッセイ

集二足の靴」「エッセイ集

二足の靴II」



新装開店した松竹菓子舗(1958年)

生い立ち

昭和十四年、私の夫河井雄治は北九州の若松で生まれ、戦時疎開で祖父母の実家のある岡山県頭島^{かしじま}で少年期を過します。小学校五年の時、父の戦死公報が入り、母と二人で若松の役場まで遺骨のない木片入りの木箱を受け取りに行きます。母はその木箱を抱いて号泣したと言います。

高校は奨学金で行ける香川県の国立詫間^{なごま}電波高校で寮生活を送り、昭和三十三年電電公社に入社。翌年、諫早の長崎無線電報局へ配属、無線通信士として勤務します。

一方、私は四歳の時に満州から引揚げて来ました。菓子職人だった父は、昭和二十三年、諫



旬集 十三夜

河井雄治・スエ子

Kawai Yuji-Sueko

- 判型: 四六判
- 頁数: 134頁
- 製本: 上製本

日の出町の無線が丘

夫の呑み屋のつけと奨学金の返済からスタートの新婚生活でした。共働きで三人の子どもの育児はとても大変でした。三人の息子が保育所を卒業した日は、人生の解放の日ぐらいに思えました。

昭和五十一年無線局の近くにマイホームを建て、子ども達は成長してゆきます。

昭和六十年に電電公社からNTTとなり、電気通信事業は自由化されました。電話は共電式から自動化され、現在に至るまで目まぐるしく進化しつづけています。

平成十一年、長崎無線サービスセンターは、その使命を終えモールス通信は終焉を迎えました。今はあの豊かな自然環境の中で、家族共々育てられ、多くの仲間を支えられ生活できたことに感謝しています。

閉局の朝に群れ咲く螢草



長崎無線電報サービスセンター 1990年代の桜並木

俳句道

夫は定年退職後、俳句に短歌にと古本を買い込んで、公民館講座や句会へ勇んで出かけていきました。



NHK俳句大会 入選句



2009年 日の出町文化祭

石佛に合はせたる手に木の葉ふる

NHK全国俳句大会入選句に選ばれ、東京のNHKホールに招かれ、二人で勇んで出かけた。次に中国三峽下りに誘われました。

菜の花や霧の果てまで武漢道

残念なことに、六十七歳になった時に脳内出血で倒れてしまいました。

早稲前通りに菓子舗を開店します。

昭和三十二年、諫早商業高校に進みますが、その年の七月二十五日、諫早大水害に遭遇し、松竹菓子舗は全壊しましたが、翌年には新装開店することができました。就職は友人から「電電公社」「電話交換手」をすすめられていっしょに受けて、採用されました。昭和三十五年四月、自宅から諫早電報電話局へ通勤。電話の加入者が増えていくたび、交換台も交換手も増えてゆきました。高度経済成長の時代でした。

結婚へ

職場の内外では労働組合の活動も盛んで、青年部、婦人部の交流も多かった。その頃、二人は交際から結婚へと進むことになりました。

結婚式の当日、私の住む諫早駅前通りで、まさかの火事が発生。騒然とする中を花嫁衣装で家を出ました。そのため招待してい

た近所の方々は来れなくなってしまう「前途多難……」の感を深くしました。結婚式は五百円の会員制で、実行委員会、サークル、職場の方々が盛り上げてくださいました。その時の余興が楽しかったこと。極めつけはメリヤスの長襦袢とパッチを履いた二人組(二羽)の白鳥が舞う「白鳥の湖」でした。道具屋の仲居さんまで出て来て拍手をするほど、会場は笑いの渦でした。

閉局の朝に群れ咲く螢草

仲秋の名月が近づくある秋の夜、空を見上げると満天の空に月が冴えかえっていました。「ほら！お月様がきれいよ」と私が言うと、夫は、

澄みたるを妻と語らう十三夜と詠みました。

祈りと光の情景

— 五島の教会とそのルーツ —



27. 下五島5～宮原教会-2 明治18年(1885)に民家を改造して作られ、昭和6年(1971)改築。教会の前に小さな水路がありゲンジボタルが乱舞する。ヒメボタルも玄関付近で点線を描く。(平成27年6月12日夜)



24. 下五島4～福江教会-3 クリスマスイルミネーション。(平成27年12月20日夜)



110. 下五島20～旧五輪教会-5 木造の和風建築。こうもり天井、板張りの床、窓に歴史を感じる。(平成28年2月11日午前)



53. 下五島10～三井楽教会-10 涙の元からの帰り。墓地の上に広がるきれいな夕焼け雲に遭遇。ほんに短い光のドラマ。(平成28年10月10日夕方)



163. 上五島7～キリシタン洞窟-6 朝の若松港。ここからキリシタン洞窟行の船が出る。(平成28年5月2日早朝)



124. 下五島22～江上教会-5 クリーム色の壁に青い扉が美しい。世界遺産候補リストの1つ。(平成28年7月24日午前)



180. 上五島13～頭ヶ島天主堂-2 鉄川与助設計・施工の石造りの天主堂。約10年の歳月をかけて大正8年(1919)完成。(平成27年5月5日午後)



179. 上五島13～頭ヶ島天主堂-1 有川から頭ヶ島大橋を渡ると左手の下に頭ヶ島天主堂を中心に小さな集落が見えてくる。向かい側は天主堂建設のために石を切り出したというロク口島。(平成27年5月5日午後)

判型・B5判
頁数・256頁
製本・無線綴製本
定価・3,240円(税込)
問い合わせ先
久保循環器内科
電話 0959-75-0881



テーマは祈りと光り
「祈り」は、十六世紀に伝えられて以来、幾多の迫害と苦難を乗り越えて連綿と受け継がれてきたキリスト教の信仰。その象徴として五島列島の隅々まで点々と教会が残されている。
「光」の源は、自然が織りなす彩光や人間が作り出した様々なあかりを意識して撮影をした。
信仰に伴う「心の光」と物理的な光の融合を意識したつもりであるがどこまで表現できたかはわからない。
「写真は物語」が私の基本姿勢。全体を鑑賞していただいて少しでも「物語」を感じていただければ幸いである。



普通の一主婦である私が、小さな正義感からこうして我慢できずにペンを執ります。と、どうぞお許しください。これは、先人の知恵と感性である江戸しぐさを、より良く生きたための武器として活用していただければという、私の強い思いからなのです。

前書きにこのように記してある本書は、長崎市在住の宮崎牧子さんの講演録をまとめたもので、江戸しぐさ伝承普及委員として、過去に行った講演会の内容を、平成の世に生まれた若者たちに分かりやすく語りかける内容になっています。

宮崎さんは1948年生まれ。教員だった父親の転勤に伴い、県内各所を転々として幼少期を過ごしました。長崎県立女子短期大学英文科卒業後、結婚。出産、育児の一方で、長崎市社会教育委員などを務め、地域の青少年の育成にも尽力しています。宮崎さんは、のどかな幼少期を過ごすことができた自分の環境、母親と姑からの教え、宮崎さんの人生を大きく変えた「江戸しぐさ」の提唱者・越川禮子さん

からの学び、そして、自身の長年の社会教育活動の経験から、子供の教育にとつて、地域の大人の意識が何よりも重要であると訴えています。宮崎さんが江戸しぐさを知ったのは、59歳の時。それまで引き受けていた役職の幾つかは60歳でリタイアすると決めており、退任後に学べるものを探していた頃でした。

江戸しぐさの心を長崎に 未来の長崎の リーダーたちへ



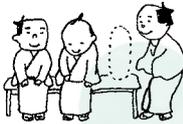
宮崎 牧子

当時、福岡市で定期的に開かれていた勉強会に通っていた宮崎さんは、そこで「江戸しぐさ」に出会います。提唱者である「NPO法人江戸しぐさ」名誉会長の越川禮子氏に直接話す機会を得て、弟子入りを許されました。以来、師と仰ぐ越川氏の指導のもと、江戸しぐさを学び、伝承普及

委員として活動しています。江戸しぐさという言葉を知らない人でも、「雨降る路地ですれ違う際には、傘を相手の反対側に傾け、相手が濡れないようにして道を譲る」「狭い道ですれ違う時には、ぶつからないように、お互いが肩を引く」「狭い場所では横歩きをして相手の動作を妨げな



- 判型:四六判
- 頁数:254頁
- 製本:無線綴りカバー付
- 定価:1,404円(税込)



い」などのしぐさは、どこかで見たような、あるいはかつて自分も実践していた行動ではないでしょうか。しかし、いつしかこのしぐさをする人は少なくなり、相手を思いやる精神自体も希薄になりました。宮崎さんはその結果、青少年や弱者が犠牲となる事件が増加したのだと思うと言います。県内でも青少年が巻き込まれる事件があり、このような危機感から宮崎さんは、江戸しぐさを日本文化の継承として、本質を曲げることなくかつ長崎らしい文化につなげていくことに配慮しています。平成の今にふさわしい形の「長崎しぐさ」として、広く認められるようお願いしながら、中学生、高校生から社会人、高齢者まで含めた幅広い対象

者に講演を通じて語りかけています。



江戸しぐさの存在を知り、普及活動に邁進する宮崎さんは、自らの行動を「江戸しぐさの」存在を知ってしまった私の使命」と捉えているそうです。宮崎さんが使命感に突き動かされて記した「江戸しぐさの心を長崎に 未来の長崎のリーダーたちへ」。江戸時代の豪商たちの知恵と知識、教養から生まれた江戸しぐさを紹介しながら、社会の中で生きていくものとしての役割についても記してあり、決して懐古主義では終わらず、何を成すべきかを分かりやすく説いています。本書は宮崎さん自身も言うように、一主婦が書き上げた一冊です。情熱を持って書き上げたこの本の持つパワーは、著者である宮崎さんそのものです。宮崎さんのパワーに共感し、寄稿してください。長崎の著名人の皆さんの5編も、それぞれ非常に読み応えのあるものになっています。

敬天愛人の系譜

鎮西学院人物伝

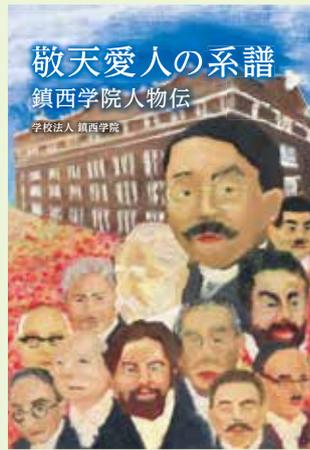
学校法人 鎮西学院

2016（平成28）年、長崎県諫早市にある学校法人鎮西学院は創立135年を迎えました。本書は、これを記念して鎮西学院人物伝編纂委員会が製作したものです。

執筆したのは学院長をはじめ、ウエスレヤン大学の名誉教授や鎮西学院高校の現役教諭など、学院に深く関わる方々です。鎮西学院が輩出した、近代日本の功労者たちの記録は、次世代の若者たちへと手渡す、歴史のバトンとも言える思いのこもったものになりました。



1930（昭和5）年 竹の久保に移転、新校舎竣工、
1931（昭和6）年 創立50周年を迎える



●判型:四六判 ●製本:無線綴りカバー付
●頁数:218頁 ●非売品



川崎 升



扁額・校訓「敬天愛人」 西郷南洲書

学校法人鎮西学院は1881（明治14）年、アメリカメソジスト監督教会から派遣された宣教師、C・S・ロングにより長崎市東山手6番地に設立されました。当初、加伯利（カブリー）英和学校という校名でしたが、1889年（明治22）年、鎮西学館と校名を改め、後に鎮西学院となりました。

学院はやがて新校舎竣工に伴い、市内の竹の久保へ移転します。竹の久保校舎は近代的な鉄筋コンクリートの4階建てで、暖房装置や水洗トイレなど、当時としては優れた建造物でした。しかし、誇るべきこの校舎も、1945（昭和20）年、第二次世界大戦時の原爆投下により壊滅。職員

と生徒140名以上が犠牲となって亡くなりました。

その後、学院は諫早市永昌町の海軍病院跡に移転します。その翌年には鎮西学院中学校、その1年後には高等学校を新設。1951（昭和26）年には中井が原ゴルフ場跡地を購入し、全面移転します。開校当初は生徒が12名、教師が4名のスタートでしたが、時を経た現在では幼稚園、高校、大学を擁する総合学園として発展を続けています。

学院の創立当時は日本が江戸から明治へと、文化文明の舵を大きく切った10数年後。暦、髪型、食事など、生活習慣のほぼ全てが極端な変化を余儀なくされた時代でした。その状況の中で、事を新たにしようとした人々が一緒に辿った苦難の道は、鎮西学院の先達も同じことでした。本書にもありますが、時代が変わったとはいえ、九州ではキリスト教に対する偏見も、決して少なくはなかった頃でした。そんな中、強い信仰の絆に結ばれた人々の物語が、後に続く同窓の皆様の筆により、本書で生き生きと蘇っています。

文学者、池澤夏樹氏による巻頭言に続く第1章は、本書

の要とも言える、鎮西学院出身者で初めて学院長となった川崎升についてと、その教えであり、本書のタイトルにもなっている「敬天愛人」の思想について、森泰一郎学院長が執筆しています。

日本メソジスト教会牧師であり、教育者の川崎升は日向飲肥（現日南市）の旧藩士の長男として1870（明治3）年に生まれました。1891（明治24）年に鎮西学館（現・鎮西学院）に入学。卒業後は九州各地で伝道に従事。その後、米國ボストン大学にて神学を学び、修士の学位を授与しました。

1907（明治40）年、鎮西学院の教師として迎えられる1926（大正15）年、鎮西学院出身者としては初めて、学院長として就任しました。この後15年にわたり奉職しました。

新校舎建築で無理がたたり1936（昭和11年）に67歳で逝去しましたが、多くの教育者に良き影響を与え続けた川崎升の名は、今も学院の人々の心に深く刻まれています。

第1章にはこの他に、いずれも川崎と縁の深い人たち4人の筆者による4節が含まれています。

第1節の著者である林田秀



田添鉄二(一家)



宮崎滔天



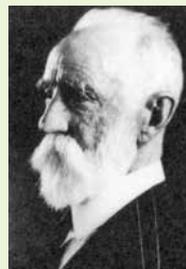
遠山参良



倉場富三郎



ロング



デヴィンソン



西岡竹次郎



松本卓夫



中山福藏

(鎮西学院校友会関西支部総会前列右より4人目)



佐野勝也



秋吉利雄



宇土虎雄(鎮西学院で揮毫)



鎮西学院全景(2011年4月撮影)

彦名誉院長は、川崎升が生き
た時代背景と照らし合わせな
がら、当時から多くの若者に
慕われていた川崎と、川崎升
の親族についても深い愛情と
ユーモアを持って紹介してい
ます。

日々の暮らし全てにおいて
厳格な教育者だった一方で、
慈愛に満ちた父親の一面を記
したのは小谷千代さん。小谷
さんは川崎升の長女であり、
鎮西学院の元職員でした。そ
の小谷千代さんの授業を受け
た学院の卒業生の山口哲生さ
んも、当時を多感な青春時代
の1ページとして懐かしみな
がら書いています。

また、鎮西学院高等学校の
川崎健教諭は、川崎升のお孫
さんです。母親が中学生の時
にはすでに亡くなっていた川
崎升ですが、今回の本書制作
がきっかけで、亡き祖父の人

となりに触れたと述懐してい
ます。

第2章からは、鎮西学院を
卒業、あるいは学院に学んだ
著名人について、9人の筆者
が筆を奮っています。

第2章は九州全域において
宣教活動を行い、後に出島メ
ソジスト教会を建設したデ
ヴィンソンと、学院の初代校長
となった神学者、C・S・ロ
ングについて長崎ウエスレヤ
ン大学の山城順名誉教授が執
筆。長崎県におけるキリスト
教の新たな教育の始まりを記
しています。

第3章は倉場富三郎。筆者
は長崎ウエスレヤン大学の藤
崎亮一准教授が担当していま
す。

富三郎は加伯利英和学校に
第1期生として入学しますが、
卒業することなく、幾つかの

学び舎を転々とします。米国
では最終的にフィラデルフィ
アのペンシルバニア大学に留
学し、生物学を学びます。偉
大なる父、トーマス・ブレイ
ク・グラバーの陰に隠れてし
まいがちな富三郎ですが、こ
こで学んだ生物学が後年、彼
にグラバー魚譜の作成へと向
かわせます。漁業が基幹産業
の一つとなっている長崎県に
とって、富三郎の残した功績
には大きなものがあります。

第二次世界大戦後の長崎で、
謎の自死を遂げた富三郎はそ
の人生では、謎とされる部分
も多く、偉大な父を超えられ
なかった悲劇の人とされがち
です。しかし藤崎准教授は本
書の中で、もつともつと評価
されるべきであると述べてい
ます。

この後、章を追って、遠山
参良、宮崎滔天、田添鉄二、

松本卓夫、中山福藏、西岡竹
次郎、佐野勝也、秋吉利雄、
宇土虎雄と続きます。どの人
物もそれぞれの立場で、近代
日本に影響を与えました。た
だ、富三郎のように、長崎県
内では広く知られた人物もい
れば、若い人にはあまり馴染
みのない人もいます。

しかし、その人々が懸命に
生きた人生の1ページを、現
代の教育者たちが文章化し、
「本」という形にして残すこ
とは非常に有意義なことであ
り、135年の長きにわたっ
て「教育」に打ち込んだ鎮西
学院の教育機関としての姿勢
を物語っているのではないで
しょうか。

出版本

ここでご紹介する出版本は、
サロンゆるりまでお気軽に
お問い合わせください。 2017年5月現在(税込額)



新刊・近刊ご紹介

昭和堂・ゆるりで
出版します本の紹介



杉山龍雄画集



杉山 龍雄
●判型:250×250
●頁数:96頁
●製本:糸綴製本
●非売品

50周年記念DVD

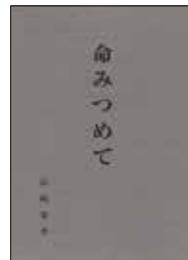


長崎県被爆者
手帳友の会
●ビデオで綴る50年
●32分
●非売品



小説
終わりになき恋

馬場 美和子
●判型:B6判
●頁数:128頁
●製本:無線フランス製本
●非売品



随筆集
命みつめて

山崎 泰介
●判型:B5判
●頁数:104頁
●製本:無線フランス製本
●非売品



追悼集
萌桜

北浦 ひとみ
●判型:A5判
●頁数:44頁
●製本:無線フランス製本
●非売品

音楽史
調性によるカラー版、
133人の作曲家1946曲
伊東 昭郎 ●5、400円

長崎 幻の響写真館
根本 千絵 ●2、160円

キラキラ
人生を輝かせる
わたしたちの大切なこと
「ごまなみ」
●1、620円

きくちゃんのうた Vol.2
ひらた きくよ ●1、620円

きくちゃんの詩
ひらた きくよ ●1、296円

神様からの贈りもの
幸夏 涼 ●1、296円

**英文観光ガイド長崎
ハンドブック**
長崎通訳研究会 ●600円
お問合せ先 電話〇九五―八二―五四八四

歌集 筑後川
辻 武男 ●2、160円

玉鈴 水墨画集
―墨色の千変万化に―
魅せられて―
田村 玉鈴 ●4、860円

松林重宗水彩画集
松林 重宗 ●3、240円

長崎を描いてわかる
松林 重宗 ●2、160円

**平成28年版 諏訪神事
「長崎くんち」取材記録**
見えないものを伝える
土肥原 弘久 ●1、080円
お問合せ先 電話〇九〇―二五〇〇―〇五九七 土肥原さんまで

**もう一人の少年使節
ドランド**
青山 敦夫 ●1、200円

塩飽史
江戸時代の公儀船方
吉田 幸男 ●2、700円

**島原三會村郷土誌
大正七年(復刻版)**
西村 仁 ●2、160円

**昭和20年8月
長崎市地図**
出口 輝夫 ●540円

たゆたう(二)～(十) 松本 風作 ●各1,028円

(二) (三) (四) (五) (六) (八)

本の内容はホームページでもご案内しています [自費出版サロンゆるり](#) [検索](#)

そこに光があるから

北川暢子 第1詩集

2017年6月20日発行
県内主要書店、アマゾンでも購入できます。
ゆるりへお問い合わせ下さい。

■判型:四六判 ■製本:無線綴じケース付
■頁数:64頁 ■定価:1,080円(税込)



木々の緑の美しい春、「新学期だなぁ。」と思いながら、出版作業をしている私がいきました。十一年前まで二十年間、私は中学校の教師をしていました。本来なら慌ただしいはずの春は、ひとりゆっくりしているのは寂しくもありませんが、教員生活、およびその後の主婦生活（おもに闘病生活）で得たものは大きく、それがないければ詩など書くこともなかったと思われず。詩は「私の心の友」でした。思いのたけを綴れる

「秘め事ノト」です。ところで、タイトルの「そこに光があるから」は、暗闇から抜け出せなかつた頃、かすかな光を求めて「前に進もう、

前に進もう。」としていたときに、自分に言い聞かせていたことばです。何かをしようとすれば何かが見えてくる。それが私を照らすかすかな光でも、まるで雲をつかむかのように手を伸ばして、光をつかもうとしていた自分自身の姿が浮かびます。そのいちばん苦しかった時期に、いろんな場面を思い起こしながら書いたのがこれらの詩です。うまくいかないときも苦しいときも、詩を書くことで救われていた気がします。また、感動や感激の瞬間を詩にすることで、それが一生心に刻み込まれる勲章のようにも感じられました。封印してきた詩を表に出そうと思ったのは、昨年八月三十一日の夫の死がきっかけでした。夫に支えられてきたように、私は詩を書くことで自分自身を保持してきたように思います。愛する夫に贈るレクイエムとして、これらの詩を世に出そうと思います。多くの方に読んでいただき、どんな暗闇の中にもやがて光がさしてくることを、どんなに遠回りと思われることも決して無駄で

はないことを感じていただけたらありがたいです。
(あとがきより)

孤独との闘い

ひとりぼっちで寂しいときも

あなたは ずっと私を見守っていてくれる

泣きじゃくって

途方に暮れる私に

「大丈夫だよ！」って

もつと

いっしょにいられたら

私の心に

大きな穴はあかなかったのに……

あのとこの私でいられたら

私のもつと強くなっていったよ！

きつと！

どこにも逃げられない

けれど

私にふりそそぐ

星の光があなたとなつて

星空が大好きになつたよ！

何も始まらない日

何かが始まる日

何かを始めないと

何も始まらない日

誰かが始めないと何も始まらない日

それは誰かのためでなく

自分のため

納得できる生を

全うするため

何もしないことより

何かができる幸せは大きい

何もしないことより

苦しいけれど

何もしない虚しさより

そこには脈打つ光があるから

心があるから

その光とともに

歩き続けたい

たとえひとりでも

待っていてくれる

ただひとりのためでも……



あなたの本や作品をラジオで紹介します!!



あさか



『昭和堂笑顔のレシピ』

毎週金曜 あさ10:35より

放送中
きてネ!!



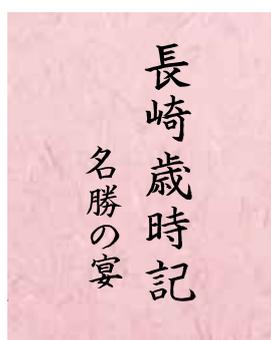


堤けんじ 長崎歳時記 名勝の宴

タヌキと共に歩んで41年。平成29年2月の「長崎歳時記・名勝の宴」色紙展には、大雪が降る中、沢山の人がおいで頂き、ありがとうございました。

今回も沢山の協賛金を頂き画集を作ることができました。これも皆様の暖かいご支援があったからこそ思っております。

「長崎くんち」に始まり、街道に魅了され「長崎街道」へと、関門海峡を飛び越えて瀬戸内海の夕日に感動、東海道のすごさにビックリ、そして江戸（東京）へ。さらに「龍馬紀行」で高知、京都など龍馬ゆかりの地を訪れました。そして松尾芭蕉に導かれ、「おくのほそ道」へと東北北陸路へと歩んで行きました。



- 判型:230×290
- 頁数:78頁
- 定価:2,700円(税込)

ふと気がつけば、足元の長崎を忘れてはいなかったかと思ひ、今回の色紙展になりました。そして画集発

刊となりました。ホントにありがとうございました。

体力、時間もきびしくなってきましたが、これらをうまく乗り切って、これからも頑張っていきたいと思ひます。

最後になりましたが、今回画集に協賛して頂いた方、各報道機関の皆さん、ありがとうございました。

そして……わがふるさと「長崎」へ感謝!!

堤けんじ

タヌキのささやき

ムムム……ここところタヌキ寝入りしとったら「タヌキもくたばるとるごたる」という声が聞こえてきた。……まだまだ元気ですバイ!!

すぐれた作品が生まれる季節です

洋画材料・日本画材料・油彩額・水彩額・和額の長崎の専門店

(有) 彩美堂



TEL 095-824-8774

FAX 095-824-8726

<http://www.saibidou.com/>

〒850-0801 長崎県長崎市八幡町3-32

営業時間 / 9:30~19:30 (平日、土曜)

10:00~17:30 (日曜、祝日)

定休日 / お盆・年末年始

あなたの想いを本にしませんか



『ゆるり』とは、囲炉裏の意味。囲炉裏を囲むように、皆さんで集まっていられる空間に・・・との願いが込められています。和の雰囲気を感じられる空間で、ゆっくりゆるりと、本づくり談義に花を咲かせてみてはいかがでしょうか。



自費出版サロン

ゆるり

TEL.095-828-1790

昭和堂ギャラリー
Showado Gallery KOFU

好風

TEL.821-1240

FAX.095-823-8740 <http://www.showado.co.jp>

〒850-0875 長崎市栄町6-23 昭和堂ビル2F

貸ギャラリーお申し込み受付中



情報誌「ゆるり」は
カタログポケット機能付き
カタログポケットとは？

- スマホ、タブレットで読める。
- 文字サイズを調整できる。
- 音声読み上げもできる。

※音声読み上げにはアプリのインストールが必要です。
PCブラウザは音声読み上げには対応していません。



スマホで読める「ゆるり」 デジタルブック配信開始!

上のQRコードより無料アプリ「Catalog Pocket」をインストールし、「ゆるり」で検索!!

第89回 長崎交響楽団 定期演奏会



ベートーベン 交響曲第3番 「英雄」

ドビュッシー「小組曲」
メンデルスゾーン 序曲「フィンガルの洞窟」

平成29年

9月3日 日 開場 13:30
開演 14:00

長崎市民会館 文化ホール

指揮
永野 哲



入場料

一般自由席：2,000円

学生自由席(高校生以下)：1,000円

■ チケットお取り扱い

浜屋プレイガイド 095-811-1080 絃洋会楽器店 095-821-2326
くさの書店西友店 095-857-2560 長崎交響楽団事務局 095-820-1029

■ 主催：長崎交響楽団

■ 後援：長崎県 長崎市 長崎県教育委員会 長崎市教育委員会 朝日新聞社 長崎新聞社 西日本新聞社 毎日新聞社 読売新聞西部本社
NHK長崎放送局 NBC長崎放送 KTNテレビ長崎 NCC長崎文化放送 NIB長崎国際テレビ エフエム長崎 長崎ケーブルメディア 長崎県音楽連盟

お問い合わせ 長崎交響楽団事務局 TEL 095-820-1029 FAX 095-832-6570 MAIL nso@ac.auone-net.jp URL <http://www.ac.auone-net.jp/~nso/>

音楽をつくる・音楽を支える
団員・サポーター募集中♪

* 練習会場 * 長崎ブリックホールリハーサル室 ほか
* 練習日 * 毎週土曜日 ※弦・管・打楽器

演奏会のPR チラシ・ポスターの配布 受付応援 ほか
※演奏会チケットをプレゼント